国立国語研究所学術情報リポジトリ

The Typological Significance of Japanese Compound Verbs

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2015-10-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 影山, 太郎, KAGEYAMA, Taro
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000762

国語研プロジェクトレビュー
NINJAL Project Review　Vol.5 No.1 pp.8–18（June 2014）

〈共同研究プロジェクト紹介〉
基幹型：日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性

日本語複合動詞の言語類型論的意義

The Typological Significance of Japanese Compound Verbs

影山 太郎（KAGEYAMA Taro）

1. はじめに

本共同研究は，他のほとんどの基幹型共同研究プロジェクトと同様に，2009 年 10 月の新国語研発足から半年間の助走期間を経て 2010 年 4 月に本格的に始動し，丸 4 年が経過した。目指すところは，日本語の普遍性と個別性を解明することであるが，具体的には，レキシコン（語彙と語形成の仕組み）に関わる現代言語学の理論的イシューの中から，ヨーロッパ諸言語と比べて日本語の特徴が現れやすいと思われる 4 つの現象―(A) 属性叙述，(B) 動詞の自他と項交替［マックスプランク進化人類学研究所との研究協力］，(C) 複合動詞，(D) 語形成と意味・統語の相互作用―に焦点を絞り，それぞれ研究チームに分かれて，形態論・統語論・意味論の一般言語学的理論，外国語との比較，歴史的変化，心理実験など多角的な観点から分析を進めてきた[1]。

また，得られた学術的成果は，毎年 3〜4 回開催する公開の研究発表会のほかに，国内学会でのシンポジウム，NINJAL 国際シンポジウム（2 回），海外ジャーナル，複合動詞の電子データベース，動詞の項交替に関するマックスプランク進化人類学研究所との研究協力，共同研究の成果物としての英文論文集および英文ハンドブックなど，国内外に幅広く発信することに精力を傾けた。

主要な成果を具体的に示すと，次のようになる（個別の投稿論文や口頭発表，招待講演などはすべて省略し，共同研究としてのまとまった成果のみを掲げる）。

A. 属性叙述チーム

1. 日本言語学会第 142 回大会において公開シンポジウム「言語におけるデキゴトの世界とモノの世界」（司会　影山太郎）を開催（2011 年 6 月 19 日，日本大学）。

[1] 共同研究の体制は次のようになっている。氏名の後の記号は所属する研究チームを表す（A＝属性叙述チーム，B＝動詞の自他と項交替チーム，C＝複合動詞チーム，D＝語形成と意味・統語チーム）。影山太郎（A, B, C, D），岸本秀樹（A, B, C, D），工藤眞由美（A），仁田義雄（A），八亀裕美（A），澤田浩子（A），呉人恵（A），加藤重広（A），益岡隆志（A），沈力（A, C），喜多壮太郎（B），由本陽子（B, C, D），松本曜（B, C）John Whitman（B, C），Prashant Pardeshi（B, C），杉岡洋子（B, D），辻村成津子（B, D），青木博史（C），塚本秀樹（C），栗林裕（C），玉岡賀津雄（C），梅谷博之（C），Wesley M. Jacobsen（C, D），竝木崇康（D），秋田喜美（D），小林英樹（D），中谷健太郎（D），竹沢幸一（D），伊藤たかね（D），上原聡（D），小野尚之（D），斎藤倫明（D），朱京偉（D）

2. 論文集として, 影山太郎（編）『属性叙述の世界』を出版（くろしお出版, 2012 年 3 月）。内容は『国語研プロジェクトレビュー』第 3 巻第 2 号の「著書紹介」を参照。
3. 日本と中国の言語学研究の交流促進を意図し，属性叙述に関する論文を含む論文集として，影山太郎・沈力（編）『日中理論言語学の新展望』全 3 巻を刊行した（くろしお出版。第 1 巻 2011 年 11 月，第 2 巻 2012 年 3 月，第 3 巻 2012 年 5 月）。

B. 動詞の自他と項交替チーム

4. マックスプランク進化人類学研究所との研究協力に基づき，同研究所の国際会議 “Conference on Valency Classes in the World’s Languages”（2011 年 4 月 14–17 日，ライプチヒ）に参加し，Hideki Kishimoto and Taro Kageyama “Valency Classes in Japanese I: Standard Language” と Kan Sasaki “Valency Classes in Japanese II: Dialects” を発表。
5. 上記 4 の発表内容をまとめた論文として Hideki Kishimoto, Taro Kageyama, and Kan Sasaki “Valency Classes in Japanese” を Bernard Comrie and Andrej Malchukov（eds.）*Valency Classes: A Comparative Handbook* に掲載（Berlin: De Gruyter Mouton，2014 年出版予定）。
6. 上記 4 の基礎資料となる自他交替データ（標準日本語および北海道方言）を “Valency Patterns Leipzig（ValPal）Online Database” に掲載（http://valpal.info, マックスプランク進化人類学研究所，2013 年 11 月試験公開）。
7. マックスプランク進化人類学研究所との研究協力により，NINJAL 国際シンポジウム “Valency Classes and Alternations in Japanese” を開催（2012 年 8 月 4・5 日，参加者延べ 250 名。招待発表 17 件，一般公募ポスター発表 7 件）。
8. 上記 7 の招待発表を中心に，Taro Kageyama and Wesley M. Jacobsen（eds.）*Transitivity and Valency Alternations: Studies on Japanese and Beyond* を執筆・編集（De Gruyter Mouton，2015 年出版予定）。

C. 複合動詞チーム

9. 動詞連用形＋動詞型の複合動詞に関する国内外の研究文献一覧表を作成し，国語研ウェブサイトで公開（2012 年）。
10. 窪薗晴夫プロジェクトと共同で, 第 37 回関西言語学会において公開シンポジウム「日本語レキシコン研究の最前線」を開催（2012 年 6 月 2 日，甲南女子大学）。
11. 共同研究者および若手研究者の論考を含む論文集として，影山太郎（編）『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて—』を出版（ひつじ書房, 2013 年 12 月）。内容は『国語研プロジェクトレビュー』本号「著書紹介」を参照。
12. 言語対照研究系と共同で NINJAL 国際シンポジウム “Mysteries of Verb-Verb Complexes in Asian Languages” を開催（2013 年 12 月 14・15 日，参加者延べ 240 名）。招待発表 15 件と一般公募ポスター発表 15 件（招待発表を中心に英文論文集の国際出版を計画中）。なお，二日目は日本語複合動詞の習得・教育に関する分科会（司会　玉岡賀津雄）を同時開催（参加約 60 名）。
13. オンラインデータベースとして，影山太郎・神崎享子『複合動詞レキシコン』（英語，中国語，韓国語対訳を含む国際版）を構築し，国語研のウェブサイトで公開（2014

年 3 月）。詳細は本稿第 4 節で紹介。

D. 語形成と意味・統語チーム

14. 理論言語学の専門ジャーナル *Lingua* 120（2010）の日本語音韻論・形態論特集号に，共同研究者による論文 3 篇を掲載（Taro Kageyama, Yoko Yumoto, Takayasu Namiki）。
15. 影山太郎（編）『レキシコンフォーラム No. 6』（ひつじ書房，2013 年 1 月）に，共同研究者の執筆による特集「日本語レキシコン入門」（8 篇）を掲載。内容は『国語研プロジェクトレビュー』第 4 巻第 2 号を参照。
16. *Oxford Bibliographies Online* に，日本語語形成に関する国内外の主要な研究文献を俯瞰・解題した解説文 “Word Formation in Japanese”（Taro Kageyama）を掲載（2014 年 3 月）。
17. 日本語研究に関する包括的英文ハンドブックシリーズ（Masayoshi Shibatani and Taro Kageyama（Series Editors）, Handbooks of Japanese Language and Linguistics）の一巻として，Taro Kageyama and Hideki Kishimoto（eds.）*The Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation*（全 21 章）を執筆・編集（De Gruyter Mouton，2015 年出版予定）。

以上概略したように, 本プロジェクトは, 2015 年に刊行予定の論文集（8）と英文ハンドブック（17）を除き，印刷成果物の刊行，国際シンポジウムや共同研究発表会などの催し，電子データベースの構築・公開など，発足当初に計画した目標はほぼすべて，かなり高い次元で達成したと判断される。このことから, 筆者（所長）がリーダーを務める共同研究の活動は，このプロジェクト紹介文をもって実質的には幕を閉じることにしたい。

以下では，前回（『国語研プロジェクトレビュー』第 6 号，2011 年 10 月）に紹介した属性叙述チームを除き，複合動詞，動詞の自他と項交替，および語形成と意味・統語のチームによる研究の中から，リーダー自身が関わる発見を幾つか紹介し，最後には，本プロジェクトの最大の社会貢献として「複合動詞レキシコン」のオンラインデータベースについて触れることにする。

日本語の語形成過程には，複合のほか，派生，屈折（接頭辞，接尾辞），品詞転換，接語化，重複，短縮，混成など多様なタイプがあり，しかもこれらは，和語，漢語，外来語，擬態語という語彙層によっても適用が異なってくる。しかし和語に基づく語形成で，理論研究の観点から特に注目されるのは複合（compounding）である。とりわけ，英語には名詞＋動詞，動詞＋動詞のような述語を派生する複合が少ないのと対照的に，日本語にはこのような述語を形成する複合操作が何種類か存在する（Kageyama 2009）。小論では，第 2 節で名詞＋動詞型の複合動詞, 第 3 節で動詞連用形＋動詞型の複合動詞について筆者の新たな見解を述べる。この 2 種類の複合動詞を取り上げるのは，これらが世界諸言語の言語類型においても興味深い示唆を提供するからであり，ここに，日本語レキシコンを研究することの，ひとつの大きな意義があると考えるからである。

2. 名詞＋動詞型の複合動詞[2]

一般に，「飛び込み始めかけたがる」のような複数の動詞や助動詞を連ねた複合動詞は膠着型（agglutinative）の言語の特徴であり，「旅立つ」のような名詞＋動詞型の動詞合成（名詞抱合 Noun Incorporation，名詞編入とも言う）は複統合型（polysynthetic）の言語に特徴的であると考えられている。名詞抱合の典型的な例は（1b）に例示される Mohawk 語である（Baker 1996: 12）。この例に見られるように，名詞が文の項として表出された場合（1a）と，名詞が動詞の内部に組み込まれた場合（1b）が共存することが名詞抱合の特徴である。

（1） a. *Wa'-k-hninu-'* *ne* *ka-**nakt**-a'*.（'bed' が 'buy' の目的語として表出された構造）
FACT-1SS-buy-PUNC NE NS-**bed**-NSF
'I bought the/a bed.'

b. *Wa'-ke-**nakt**-a-hninu-'*.（'bed' と 'buy' が一語に組み込まれた名詞抱合構造）
FACT-1SS-**bed**-Ø-buy-PUNC
'I bought the/a bed.'

複統合型言語というのは，動詞語幹に主語や目的語の一致形態素が組み込まれる複雑な動詞構造を持ち，Baker（1996）の理論では，名詞抱合はこのような統語的一致（agreement）によって認可される。

ところが，日本語は複統合型ではないのに，名詞＋動詞型の複合動詞が頻繁に観察される。

（2） a. 主語＋非対格動詞の関係
芽生える，目覚める，色づく，傷つく，泡立つ，色褪せる，渦巻く，元気づく，息絶える

b. 目的語＋他動詞の関係
習慣づける，身構える，口出す，手間取る，棹さす，鞭打つ，気遣う，年取る，精出す

c. 手段，方向，経路などの副詞的関係
つま先立つ，手招く，横切る，先立つ，くしけずる，爪弾く，手渡す，下回る

これらの日本語動詞も，（1a, 1b）の Mohawk 語のように，「目覚める」なら「目が覚める」，「身構える」なら「身を構える」のように，対応する統語構造を持っている。なお，他動詞の主語を含む例は，複統合型言語と同様に日本語の和語複合動詞においても皆無と言ってよい。一見，「蝕む」（虫＋食む）がその例のように見えるが，これは「病が彼女を蝕んだ」のように比喩的な使い方しかなく，「虫」は主語というより，「あたかも虫が食うように」という比

[2] 本節は，2014 年 2 月 21 日に開かれた国語研シンポジウム "Polysynthesis in the World's Languages" での口頭発表 "Noun incorporation-like phenomena in Japanese: At the crossroads of polysynthesis and agglutination" の内容を略述するものである。正確なデータと分析は，Kageyama (forthcoming, b) で述べる予定である。

喩的な様態を意味する。このように，名詞＋動詞型の複合動詞は，名詞と動詞との意味的・文法的関係が限定されているが，これは日本語だけに限らず，複統合型の名詞抱合にも当てはまる。

では，（2）に例示したような日本語の複合動詞は「名詞抱合」と呼んでよいのだろうか。以下では，（2）タイプの日本語複合動詞と複統合型言語の名詞抱合では質的な相違があることを指摘する。

まず，生産性であるが，複統合型言語の名詞抱合が生産的であるのに対して，日本語の名詞＋動詞型複合動詞は語彙的に決められている。中には，「紐解く，棹さす，色褪せる，心がける，骨折る」のように全体が特別の意味に発展したり，「赴く，育む，頷く，躓く，偏る」のように一字の漢字で表記されたりして，一語化しているものもある。

（2）タイプの表現は，統語的な観点から見ても，語彙的に固定した言い方であることが分かる。たとえば，もし「目覚める」が「目が覚める」という統語形式から派生されるのなら，複合語の中の「目」だけを省略することが可能なはずであるが，実際には（3a）に対する（3b ii）の答えは非文法的である。

（3）　a.　赤ん坊は，もう目覚めましたか？
　　b.　はい，｛i. 目覚めました/ii. *覚めました｝。

日本語は pro drop 言語であるから，「目」が統語的に独立している段階で「省略」すると，（3b ii）の答えが許されるはずである。実際，「目が覚めましたか？」という統語構造を用いた質問に対しては，「はい，覚めました」という答えは文法的である。このことから，「目覚める」はもともとレキシコンで作られる複合語であり，「目が覚める」という統語構造に由来するのではないと言える。

さて，複統合型の名詞抱合は，研究文献に挙げられた多数の例で見る限りでは，必ず，定形文（時制文）に現れる。これに対して，日本語の名詞＋動詞型複合動詞は，定形（時制付き）の例は（2）に挙げたような語彙的に決まった表現（65 語程度）に限られる。さらに，これまでの日本語研究でほとんど気づかれなかったことであるが，不定形（つまり時制なし）の構文では名詞＋動詞型複合語が比較的よく現れる。不定形（時制なし）構文とは，具体的に言うと，連体修飾構文と，テ形構文である。

（4）　a.　連体修飾構文
　　道行く（人），風薫る（季節），勇気ある（行動），天に唾する（行為），水温む（季節）
　　b.　テ形構文
　　汗水垂らして，心して，額に汗して，手ぐすね引いて

これらは，「*彼は急いで道行った」や「*彼らは手ぐすね引いた」のような時制文で使うことができない。なお，（2），（4）は複合動詞の例であるが，同じ現象が名詞＋形容詞型の複

合形容詞（「遜色ない，見目麗しい（女性），愛想よく」など）にも共通して観察される。

連体形とテ形よりさらに定形（finiteness）の度合いが下がると，純然たる名詞に近くなる。実際，日本語では「後押し，値上げ，たらい回し，裏付け」のように，名詞化した動詞を後項とする複合名詞が豊富に存在し，これらは非常に生産的である。

以上を総合すると，日本語の名詞＋動詞型の複合語は，複統合型言語で文法的な一致によって引き起こされる名詞抱合とは異なり，レキシコンで作られる複合語である。しかも，非定形（non-finite）の度合いによって生産性が支配され，時制を伴わず定形性が低いほど（つまり，名詞性が高いほど）生産性が増す。これは，複統合型の名詞抱合には見られない性質である。

3.　動詞連用形＋動詞型の複合動詞

前節の名詞＋動詞型の複合動詞が日本語では比較的少ないのとは逆に，動詞連用形＋動詞型の複合動詞は非常に生産的である。動詞連用形＋動詞型は，複統合型の言語にはほとんど見られないことから，膠着型言語の特徴と言えるかも知れない。実際，動詞＋動詞型の複合体は，Masica（1976）によると，東アジアから南アジア，そして中央アジアの一部にわたる地域的な言語類型であるとされる。しかしながら，ここで形態上の定義を明確にしておく必要がある。すなわち，連接する 2 つの動詞が間に接続形式なしに直接結び付く場合を「複合動詞（compound verbs）」とすると，間に接続的な形態―日本語の「書いて」の「テ」に当たるような形態―が入る場合は，純然たる複合語にはなっていないため，「複雑動詞（complex verbs）」と呼ぶのが適切である。2013 年 12 月に開催された NINJAL 国際シンポジウム “Mysteries of Verb-Verb Complexes in Asian Languages” では，現代日本語，上代日本語，琉球語，アイヌ語，韓国語，中国語，インド諸語，チュルク諸語が論じられたが，南アジアの言語はすべて，前の動詞に接続形式が付くことが分かった。「洗い流す」のような動詞＋動詞型と，「書いておく」のような複雑動詞のアジア圏における分布は，概略，表 1 のようになる。

表 1　アジア諸語における動詞複合体

	複合動詞（動詞＋動詞）	複雑動詞（テ形動詞＋補助動詞）
日本語	豊富	ある
南アジア（インド・アーリア語派）	ない	ある
中央アジア（チュルク諸語）	あまりない	ある

さらに，東アジアの中でも日本語の動詞＋動詞型複合動詞は，韓国語その他と比べて，著しく生産的で多様性に富むことも分かった。

なぜ日本語はこのように複合動詞が豊富なのか，いつの時代からそうなったのか，また，それが方言（特に琉球語）にどう反映され，第一・第二言語習得にどう影響するのか？　これらが，解明すべき「複合動詞の謎」である。謎の解明に向けて，影山（2013）では，影山

（1993）以来，広く受け入れられている語彙的・統語的の区別のうち，語彙的複合動詞を「主題関係複合動詞」と「アスペクト複合動詞」に二分することを提案している。

表２　「動詞連用形＋動詞」型複合動詞の分類

語彙的複合動詞 （2 つの動詞が直接くっつく）		統語的複合動詞 （V2 は, V1 を含む補文を取る。文の格関係は V1 で決まる。）
主題関係複合動詞 （文の格関係は主に V2 で決まる）	アスペクト複合動詞 （文の格関係は主に V1 で決まる）	
突き落とす （＝突いて落とす ／≠落として突く） 絞り出す＝絞って出す	（雨が）降りしきる （≠降ってしきる ／しきりに降る） 流れ出す≠流れて出す	出発しかける 主張しだす（＝主張し始める）

語彙的複合動詞に関する従来の分類と新分類は，（5）のように対応づけることができる。

（5）　従来の分類　　新しい分類

1. 手段：突き落とす，踏みつぶす
2. 様態：転げ落ちる，忍び寄る
3. 原因：歩き疲れる，焼け死ぬ
4. 並列：恋い慕う，慣れ親しむ

→ **主題関係複合動詞**
（thematic compound verbs）
V1，V2 ともに主題関係（項関係）を持ち，V1 は V2 を様々な意味関係で修飾する。

5. 補文関係：咲き競う，死に急ぐ
6. 副詞的：降りしきる，居あわせる

→ **アスペクト複合動詞**
（aspectual compound verbs）
文の項関係は基本的に V1 によって決まる。V2 は広い意味で語彙的アスペクトを表し，V1 が表す事象の展開について述べる。

主題関係複合動詞は，従来の「手段，様態，原因，並列」などの意味グループを包括するもので, 大雑把に言うと, 前項動詞（V1）が何らかの意味関係で後項動詞（V2）を修飾する。他方，アスペクト複合動詞―これは統語的な複合動詞ではなく，あくまで語彙的な複合動詞を指すことに注意―は，そのような修飾関係にならない。両者を見分ける目安は，「V1 テ V2」と言い換えられるかどうかである。「テ」は基本的には接続の助詞（あるいは「タ」の接続形）であるから，「V1 テ V2」と言い換えられる場合は，V1 の事象が V2 の事象より先行して（あるいは同時的に）発生すると認識されることになる。たとえば，「突き落とす」なら「突いて落とす」（すなわち，突くという行為を手段として，落とすという行為が発生する），「転げ落ちる」なら「転げて（あるいは転げながら）落ちる」（すなわち，転げると

いう動作が落ちるという事象に付随して同時並行的に起こる），「歩き疲れる」なら「歩いて疲れる」（すなわち，歩くという行為が先行し，それが原因となって疲れるという事象が発生する）というように言い換えることができる。

ところが，アスペクト複合動詞はそのような言い換えができない。「死に急ぐ」は「死んで，急ぐ」ではないし，「居あわせる」は「居て，あわせる」ではない。「咲き競う」も「咲いて，競う」とは意味が違うし，「降りしきる」に至っては，「しきる」という動詞自体が現代語にはないから，「*降って，しきる」とは言い換えられない。これらはむしろ，解釈上は，V1 と V2 の順序を逆にして，「死に急ぐ」なら「急いで死ぬ」，「咲き競う」なら「競って（競うように）咲く」，「降りしきる」なら「しきりに降る」，「居あわせる」なら「示し合わせて，ある場所に同時に居る」というように言い換えるほうが自然である。実際，古語では「降りしきる」に相当する動詞は「頻き降る」という形で現れる（『角川新版古語辞典』および上述国際シンポジウムにおける Bjarke Frellesvig の発表）。

もう少し正確に言うと，主題関係複合動詞においては，基本的に V2 が複合動詞全体の項関係（格関係）を支配するのに対して，アスペクト複合動詞では V1 のほうが複合動詞全体の項関係を支配し，V2 は V1 の事象に対して何らかの語彙的アスペクト（Aktionsart）の意味を添加するだけである。このように語彙的なアスペクト複合動詞では，V1 と V2 の意味関係が「左から右へ」という時間の流れと iconic な関係にならないために，日本語を母語とする話者にとっても，第二言語として日本語を学習する者にとっても，間違いが起こりやすい。母語習得においても，主題関係複合動詞と比べてアスペクト複合動詞の習得はかなり遅いのではないかと推測される。

アスペクト複合動詞は，形態論的にも特殊な V2 を伴うものが多い。たとえば，「呆れはてる，待ちわびる，褒めちぎる」などの V2 は単独で用いられたときと意味が異なるし，「決めあぐねる，言いふらす，着古す，呼び習わす，黙りこくる」のように V2 が自立しない場合も少なくない。

これらのことから，日本語の動詞＋動詞型複合動詞の特異性は，アスペクト複合動詞にあるのではないかと予想される。実際，共同研究者の塚本秀樹（2013）によると，韓国語には主題関係複合動詞はあるが，アスペクト複合動詞はほとんどないようである。また，2013 年の NINJAL 国際シンポジウムにおいても，このタイプに該当する複合動詞を持つ言語はひとつも報告されなかった。

さて，共同研究者の青木博史（2013）によると，古代語では 2 動詞の連続であったものが，室町時代において複合語としての結合を強めたが，その時代に既に，現代語に見られる 3 つのタイプ（表 2 を参照）が存在した。これが正しければ，「アスペクト複合動詞は主題関係複合動詞（あるいは統語的複合動詞）が歴史的に文法化したものである」といった単純な考え方は成り立たないことになる。アスペクト複合動詞の特殊性は，上述のように，形式（V1 と V2 の線的順序）と意味（V2 が V1 を修飾する関係）のミスマッチ（ねじれ）に起因するのではないかと推測されるが，なぜ日本語でそのようなミスマッチが生じるのかは，今後の検討課題である。

アスペクト複合動詞の後項（V2）は，項交替においても興味ある振舞いを示す。複合動詞は，「突き落とす」に対する「*突き落ちる」が不適格であることから分かるように，一般的には自他交替を示さない。しかしながら，「～上げる／～上がる」（たとえば「ご飯を炊き上げる／ご飯が炊き上がる」），「替える／替わる」（「駅ビルを建て替える／駅ビルが建て替わる」）のように達成（accomplishment）を表す複合動詞は比較的規則的に自他交替を示すことが明らかになった（Kageyama, forthcoming, a）。さらに言うと，これらの交替形の自動詞に見られる -ar という接尾辞は，「捕まえる」に対応する「捕まる」，「見つける」に対応する「見つかる」，「授ける」に対応する「授かる」など，語彙的受身と呼ばれる現象にも共通して抽出される形態である。このことから，アスペクト複合動詞の後項（正確に言うと，アスペクト複合動詞の後項が占める機能範疇）は，語彙的アスペクトだけでなく，語彙的なヴォイスの変更にも関与すると推測することができ，形態構造の中に，まるで統語構造のようなアスペクトとヴォイスの仕組みが存在することが見えてくるのである。

4.　オンライン辞書「複合動詞レキシコン」

アスペクト複合動詞と主題関係複合動詞の区別は，理論研究だけでなく応用面にも有意義であると考えられる。そのため，約 2,750 語の語彙的複合動詞にこの区別を適用して整理したオンライン辞書を構築し，国語研のウェブサイトで公開した。これが第 1 節で成果 13 と

して紹介した「複合動詞レキシコン」である。ただしそこでは専門用語は用いず，主題関係複合動詞は “VV”，アスペクト複合動詞は “Vs”（s は補助的な動詞 subsidiary verb）という記号で表記した。このデータベースは，言語研究者だけでなく日本語の学習者にも活用できるように，語彙的複合動詞に対してそれぞれの語構造（VV, Vs）のほか，格パターン，意味定義，文例，補足説明を付けたもので，漢字，かな，ローマ字のいずれでも検索できる。検索方法も，複合動詞全体，前項から，後項からの 3 通りが可能である。加えて，意味定義と文例にはネイティブスピーカーによる英語，中国語，韓国語の翻訳を付け，日本語原文とパラレルに参照できるようにしている。特に，漢字かな混じり表記が読めないユーザーのために，英語のトップページも作り，外国からのアクセスもしやすくした。

日本語サイト　http://vvlexicon.ninjal.ac.jp

英語サイト　http://vvlexicon.ninjal.ac.jp/en/

以上のように，このオンライン辞書は言語研究の専門家と日本語の学習者・教育者の両方をユーザーとして想定し，共同研究の理論的成果を幅広く社会に還元するものである。

●参照文献●

青木博史（2013）「複合動詞の歴史的変化」影山太郎（編）『複合動詞研究の最先端―謎の解明に向けて―』215−241. 東京：ひつじ書房.

Baker, Mark（1996）*The polysynthetic parameter*. Oxford: Oxford University Press.

影山太郎（1993）『文法と語形成』東京：ひつじ書房.

Kageyama, Taro（2009）Isolate: Japanese. In: Rochelle Lieber and Pavol Štekauer（eds.）*The Oxford handbook of compounding*, 512−526. Oxford: Oxford University Press.

影山太郎（2013）「語彙的複合動詞の新体系」影山太郎（編）『複合動詞研究の最先端―謎の解明に向けて―』3−46. 東京：ひつじ書房.

Kageyama, Taro. forthcoming a. Agents in anticausative and de-causative compound verbs. In: Taro Kageyama and Wesley M. Jacobsen（eds.）*Transitivity and valency alternations: Studies on Japanese and beyond*. Berlin: De Gruyter Mouton.

Kageyama, Taro. forthcoming b. N-incorporation and N-compounding. In: Taro Kageyama and Hideki Kishimoto（eds.）*The handbook of Japanese lexicon and word formation*. Berlin: De Gruyter Mouton.

Masica, Colin P.（1976）*Defining a linguistic area: South Asia*. Chicago: University of Chicago Press.

塚本秀樹（2013）「日本語と朝鮮語における複合動詞としての成立・不成立とその様相」影山太郎（編）『複合動詞研究の最先端―謎の解明に向けて―』301−329. 東京：ひつじ書房.

《要旨》 日本語の語形成の中でも言語類型論の観点から注目される 2 種類の複合動詞―名詞＋動詞型と動詞＋動詞型―の性質を述べた。名詞＋動詞型の複合動詞については，時制付きの定形文では生産性が低いが，動詞が時制のない非定形になると生産性が増すことを指摘した。これは，複統合型言語の名詞抱合には見られない制約である。他方，動詞＋動詞型複合動詞の特異性は，前項動詞が後項動詞を意味的に修飾する「主題関係複合動詞」

ではなく，前項動詞が複合動詞全体の項関係を支配し，後項動詞は前項動詞が表す事象に対して何らかの語彙的アスペクトの意味を添加するという特殊なタイプの「アスペクト複合動詞」に求められることを様々な考察から論じた。

Abstract: Noun-Verb compounding and Verb-Verb compounding in Japanese are shown to have typologically notable properties. The applicability of Japanese N-V compounding, unlike Noun Incorporation in polysynthetic languages, is controlled by the tensedness or finiteness of the verb constituents: it has little productivity with tensed or finite verb constituents, whereas it gains increased productivity if the verb constituents take non-finite（adnominal and gerundive）forms. The uniqueness of Japanese V-V compounding, on the other hand, is argued to be ascribed to a special group of "lexical aspectual compound verbs," where the first member determines the argument relations of a whole compound and the second member supplies a variety of *Aktionsart* meanings to the event denoted by the first member. This type of lexical compound verb, a new discovery, contrasts sharply with the familiar group of "lexical thematic compound verbs" in which the second member determines the argument relations of a whole compound, with the first member semantically modifying the second member in some way or other.

影山 太郎（かげやま・たろう）

国立国語研究所長。Ph.D.（言語学）（南カリフォルニア大学）。関西学院大学名誉教授。2009 年 10 月より現職。
主な著書：『文法と語形成』（ひつじ書房，1993），『動詞意味論』（くろしお出版，1996），『ケジメのない日本語』（岩波書店，2002），『属性叙述の世界』（編著，くろしお出版，2012），*The Oxford handbook of compounding*（分担執筆，Oxford University Press, 2009）.
受賞：市河賞（財団法人語学教育研究所，1980），第 22 回金田一京助博士記念賞（金田一京助博士記念会，1994）.
社会活動：Oxford Research Encyclopedia of Linguistics（Advisory Board），日本言語学会顧問（前会長）・評議員・元『言語研究』編集委員長，日本語学会評議員，財団法人日本国際教育支援協会理事，特定非営利活動法人言語資源協会理事.

基幹型共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」
プロジェクトリーダー　影山太郎（国立国語研究所 所長）

プロジェクトの概要

和語・漢語・外来語・擬態語を含み複雑な語彙の構成を持つ日本語レキシコン（語彙および語形成）は，世界諸言語の中でも特異な性質を豊富に備えている。本プロジェクトは，語彙の仕組みを，辞書における静的な項目列挙としてではなく，意味構造・統語構造と直接関わり合うダイナミックなプロセスとして捉え，日本語レキシコンの特質を形態論・意味論・統語論の観点から総合的に解明することを目指す。そのため，理論的分析だけでなく，外国語との比較，心理実験，歴史的変化，方言，コーパスなどによる実証性を重視した多角的なアプローチを採る。具体的には，ヨーロッパ言語と比して日本語の特徴が顕著に現れる現象として，（1）動詞の自他と項の交替，（2）動詞＋動詞型の複合動詞，（3）事象叙述と属性叙述，（4）語形成と意味・統語の相互作用という 4 つの事項に着目し分析を行う。研究成果は論文集等として国内外に発信するほか，日本語学習者にも有益なデータベースを構築する。